

楽しいパリの青空切手市

平 岩 道 夫

(切手評論家)

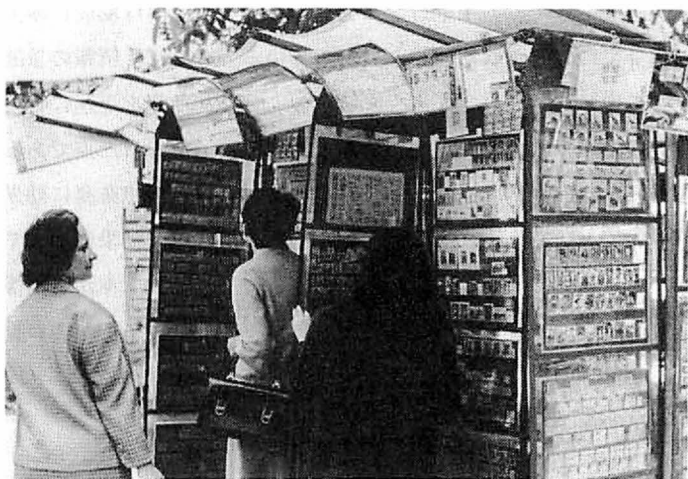
一枚の小さな切手は、
「世界を結ぶ平和の外交官、とか、
「最小面積に表現された最大の芸術品、
などといわれ、切手収集を楽しむ人は年々増え続けている。

日本の切手収集人口は、ざっと500万人。そういった人たちが、一度はぜひ見たいとあこがれているのが「パリやアムステルダム

の青空切手市、
だ。ロンドンのスタンプセンターとともに、
いまや観光名所の感さえある。

筆者は海外旅行評論家・写真家としての仕事柄、一年のうち3分の1は、海外取材に出かけているが、ヨーロッパの青空切手市は、何度訪ねても楽しい。

パリの青空切手市は、かつてオードリー・ヘップバーン主演の映画「シャレー



楽しいパリの青空切手市風景のひとつ
(現地で筆者撮影)

ド」などでも紹介されておなじみだが、雨さえ降らなければ、毎週木、土、日曜の三日間、午前十時ごろから日没まで開かれている。

かの有名な凱旋門からシャンゼリゼ大通りを下って、フランクリン・ルーズベルト通りと交差する公園の通りに面した路上がその会場。もちろん木陰だ。

切手収集をはじめてまもない学生から、定



著者略歴

1934年（昭和9年）生まれ。切手評論家、動物写真家、海外旅行評論家。

日本最初の切手評論家、現在もスポーツニッポン新聞に「平岩道夫の切手コーナー」として連載中（21年、約6,800回）、そのほか、デイリースポーツ、西日本スポーツなど各新聞、雑誌に、長期連載中である。

また、アフリカをはじめ、東南アジア、ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリアなど、20年間に220回以上海外旅行し、40冊以上の海外旅行や写真、切手などの分野の単行本を出版している。

年退職して隠居生活しているらしい老夫婦、ボーイフレンドと肩を抱き合うようにやってきたパリジェヌなど、いろいろな人たちが大にぎわい。どちらにしても切手収集が楽しくて……という人たちがばかりで、一日3,000人近くが集まってくる。

切手のピンセットやカタログを手にして、掘り出し物を探しながら歩いている人の列が切れたあたりから、テントを張った「即席切手店」が100軒ほど並んでいる。

この風景はまことに壮観のひとことにつきる。1軒1軒のぞいている人たちのうれしそうな表情には、趣味に生きる人間の共通した喜びが感じられる。

このところ激増しているのが、いわずと知れた日本人観光客。おみやげとして切手を買う人も少なくないが、パリ市内の切手店よりも2～3割安いのがうれしい。

*

 消防にちなむ切手紹介



3代目広重画「東京名所八代州町警視庁火消でぞめはしごりの図」=1980年5月31日に発行された消防100年記念切手